

●特集／新カリキュラム一般教養の展望

座談会

一般教養を どう教えるか



新カリキュラムで質量ともに強化された一般教養科目。それによって幅広く豊かな看護者育成が可能かどうか、教育担当者への期待は大きい。限られた条件のもとでの苦衷を含めて、その受けとめ方を語っていただいた。



出席者（順不同）

鈴木 敦省

（立教大学教授）

前田 アヤ

（聖路加看護大学副学長）

森 まさ子

（日赤女子短大講師）

都 築 公

（社会保険中央高看護教務主任）

荒井 蝶子

（元厚生省技官）



司会 一般教育科目が新カリキュラムにひじょうに大幅に導入された目的、意義を1つの論点といたしまして、また、第2点として新たに加わった科目も含めて一般教育科目を学生に勉強させる場合、それらの科目の活用をどうしたらいいのか、受止め方みたいなことを狙いとしましてお話をすすめていただきます。

まず初めに、前田先生にいきなりお聞きして恐縮ですが、大学ですでに一般教養科目はひじょうに大幅に広げた形で運営しているわけですが、高等看護学院の場合に、これが拡大されることによってどういうムリがあるのか心配に思うわけです。ムリということは人の問題、教員組織の問題、手持ち時間の問題、予算施設という点から考えてムリがあるかないかということが1つの大きな問題点になると思うんですが、それからもう1つは、それを新たに導入することによってどういう大きな意義が付加されて来るか、マイナスの面、プラスの面、両方から考えて行かなくちゃならないと思いますが、最初にいかがでしょうか、なにかその点についてご意見を承わればうまいと思うんですが、ムリな点からやっていったほうが早いんじゃないでしょうか。

前田 ムリがあるかないかということはどちらともいえないわけですね、私はムリはないと思うんです。教えようと思う者は、そう思っております。

司会 ということは、科目数の増加はカリキュラム運営上、そんなに犠牲を払わなくてもいいということですね。

前田 はい。

司会 人件費についても、専門科目の充実強化ということを考えても、一般教育が広がったことによってあまりマイナスではないということでは

すね。

前田 そういうことはないでしょう。ただいえることは、地方によっては先生を得がたいというところもあるかも知れませんが、それはムリだと思いますよ。

それからもう1つは、こういう科目を教えることによって実験が必要だとかというような施設の面から考えれば、これはお金が要するというところにも相成るんじゃないかと思えます。けれども、時間的にいってカリキュラムの組み方、という点ではムリだとはいえないと思えますね。

司会 同じような点なんです、教務主任をしていらっしゃる都築先生のようなお立場ですと、現在の学校規模からいって、いかがなものなのでしょうか、多少のムリや犠牲が大きすぎるという面がございますか。

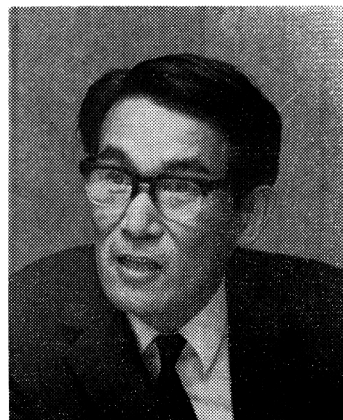
期待できるプラス面

都築 私も今、前田先生がおっしゃったように、入れること自体にはムリはないし、ほしいところがございますが、私どものような小さな学校の立場からいいますれば、経済面で少しムリが行くかなと思えますけれども、総時間数からいって、今やっております時間数からは、大体講師料その他がきつと問題になるんだと思いますけれども、大した差はない。かえっていい面のほうが私は多いような気がします。地域差はたしかに問題になると思えますね。

司会 そうしますと、むしろ明るい前向きのビジョンの面からとらえていって、それだけ内容を豊富にすることによって、それによっていくつかのプラスがあるはずなんですけれども、なにかお考えあたりになるところを教えてくださいとひじょうにうまいと思うんですが、森先生のところはいかがでしょうか。

森 実際問題として、私どもの学

校の場合には短期大学ですから、今までこちらにおあげいただいたような科目の選択というふうな形でとらせていただければ、一通り全部入っていたということでございますから、新しい面で、看護教育全体から考えてみますと、やはり人間を対象にしながら一般教養も弾力的な面で深めて、それと並行させて行くというふうな考え方からみますと、やはり広い見地から考えて全人的な教育と職業人の教育という二面での効果を狙っていると思います。うまくそれを教育の中にインティグレートできるような形で導入できた場合には、たいへんいい結果が得られるような



鈴木敦省先生

気がいたします。

一般教育のねらいは何か

司会 司会がものをいっちゃいかんと思いますが、よくいうんですね、一般教育に限ってですけれども、われわれは専門科目、専門科学の隣接諸科学について何もかもすべての科学を学ぶことは不可能だと思う限界がございますから、そういう場合に、むしろ科学の原理なり、科学の知識体系が現実の社会事象とどうかかわり合うか、そのかわり合いの仕方をよくにらんでいることが大切でしょう。

皆さんは看護を中心として社会事象をいろいろと研究なされていると思うんですけれども、その場合に、基底が広いほど科学と社会事象とのかかわり合い、あるいは人間の問題とのかかわり合いというようなことも読みがひじょうに深くなる。科目が増加したことによって視野が拡大されるという点ではまずプラスがあると思います。

視野の拡大もさることながら、もう1つは、将来看護研究なり、ご専門のほうの研究に入られた際に、ひじょうにベースが強くなると、今いったようなことと同じようなことに

なりますが、スタッフが将来管理職ナースというんですか、そういうお仕事に変わって行かれる時期が来ても、あらゆる方面への転換能力という面でひじょうにベースが強くなる。それはこんどのカリキュラムの狙っている1つの大きな狙いじゃないでしょうかと考えるわけです。荒井先生いかがでしょうか、科目数が増加したことによって次に打ち出されて来るプラス面をなにか卒直にお話いただけませんか。

基礎固めに大きな力

荒井 やはり看護に携わる職員の中でもこういう教育を受けた人が将来リーダーシップをとって行く立場に立つか、あるいは指導者としての仕事を受持つというような、いわゆるプロフェッショナルナースという形で病人の看護なり、公衆衛生看護なりに携って行く場合には、やはり最初の段階から、鈴木先生がおっしゃったような、将来どのように展開していても持ちこたえ得るだけの基礎的なものはどうしても必要じゃないか。より能率的なリーダーにな

ったり、あるいは研究者になったり、あるいは教育者になるためには、やはり少なくともこれだけの基本的な教育がなされて行くべきだと思うわけです。一般教育は大学でも、駅弁大学といわれる所ですらあるわけですから当然のことで、とくに看護職全体のリーダーが、将来こういう教育を受けた人の中から出ることを思えば、決しておろそかにできない分野だと思えます。

司会 そういう転換能力を大きなものにするという点と、もうひとつは、看護研究に指向した学力の強化という点がもうひとつの大きな狙いじゃないかと私は思うんです。

もう一つ、こんな点はいかがですか。中心指導理念と申しますか、カリキュラムのセントラルアイディア、これが人間的な発達の課題にぴったり焦点を合わせて看護の体系を再編成しているような向きがおりになるようですけれども、これと一般教育との絡りみ合い（統合）がいっそうしやすくなりはしないか、ベースが拡大されたことによって、これも第3の大きな狙いではないかと思うんですか。前田先生が委員会のときにご発言になりましたですね、生活科学を一般教育系列に入れたらどうかと、一部反対のご意見もおありになったようですが、ああいう観点というのはひじょうに大事だと思うんです。かんたんにいうと、社会学、教育学、心理学と、そういうバラバラな系列を追うんじゃなくて、それらのものをシリーズにしたとき、一体それが看護の理解なり、看護研究なり、あるいは看護婦である前に人間であれという意味の基礎教養なりに貢献するという考え方、系列に意味があって、個々の科学にはそんなに期待をかけていない。だからシャトルプロジェクト（看護教育の五年計画調査）の報告でも、あの結論のほうでは、ひじょうにそれを強調し

ておりますね。社会学、教育学、心理学、経済学というバラバラなものには、そんなに大きな期待はかけられない、むしろ系列のたてかたの中に看護に向うオリエンテーションがあるんだということに重大な意味があるのですが、そう申しましても今の考え方が集中的な考え方としますと、もう一つは拡散的に、外に広めるという意味で、諸科学と社会現象のかかわり合い、あるいは人間理解へのかかわり合いを学ばせる。この2つの狙いが、集中・拡散の2つの原理で考えられます。

だから、平明な論理から割って

一般教養と専門との関連について

前田 鈴木先生のおっしゃるようなことをみんなが考えれば、一般教育科目というものを入れた意義というものがひじょうにハッキリするわけですね。だれしも一般教育科目を入れるのは人間形成だ、人間形成だと、そこへばかりみんな持つて行くわけですよ。だから、そういう意味で、たいへん大切なことをおっしゃっていただいたと思うんですが、そういうことを考えれば、ただ看護する人間形成という人格的な問題だけではないわけですよ、それを今ハッキリおっしゃっていただいたのでありがたかったんですが。

司会 そういうカリキュラムの周辺領域がひじょうにバラエティに富んで来て膨らんだ関係で、中心指導理念の徹底した実現をしていく上でカリキュラムの構成がプラスになって行くものとマイナスになって行くものとがあると思う、物理的時間が制約されておりますから。そこらをお話いただくと、学院の先生方も、おそらくこういうことに改訂の趣旨があるんだということがお考えいただけるんじゃないかと思いです。とくに一般教養科目の広がった意味が。

ったときに、一般教育課程が豊富になるということは、そこら辺にひじょうに重大な意味を持っていると思うんです。よく常識的に考えるんですが、よその専門職の短大コースでも一般教育課程をみなやっている。それなのに看護だけが短大以上に水準の高い勉強をさせていながら、一般教育が少し手薄になっているのを私は従来疑問に思っていたんですが、来るところへ来たような感じがするんですね。一般教育科目が広がったということによって、そんな点はいかがでございましょうか。

前田 こういう問題じゃないでしょうかね、教えて下さる方ですね、鈴木先生のようにハッキリと私たちに教えて下さったような考え方をもっと生徒にも徹底して下さるならば、また意義が出て来るんじゃないでしょうか。ただ心理学は心理学、教育学は教育学として教えていただくのとはちょっと。

荒井 そこで、いわゆる看護教務室の任務が生まれて来るんじゃないでしょうか。西洋料理あり、日本料理あり、あるいはお醤油あり、ソースありというのを、全部、いつどこでどういふものをどういう形で看護の中に導入して来るかとか、あるいは看護を考えるために、あるいは看護から外を見るときに、いつ、どこで、なにをインテグレート（統合）した形で出して来るかなんていうようなことを教務の先生が指導して行くこと。

前田 むずかしいね、ちょっと（笑）。

鈴木 都築先生のお考えを1つお聞かせいただいたほうがいいですね。

都築 私も実はその辺迷っているんですけど、鈴木先生がおっし

やって下さったのは、たしかにそうなんですけれども、荒井先生が、今、それは教務の責任になって来るとおっしゃるんですけれども、実際に動かして行く場合に、一般教育が、いつも看護にばかり帰って行くような行き方で教えるのは、あまり教務が、教務がということじゃなくて、私はそれはそれで、とにかく時間数が時間数ですから、看護を教える先生がその場でそれを使えるようなやり方をして行く。そのために責任を持つというやり方のほうが、一般教養として生きて行くんじゃないかこのごろちょっと考えているんですけれども、その辺がまだ決心がつかないところで。教務の責任とおっしゃる明確な根拠が？

統合できるか一般と専門

司会 カリキュラムの形としては、一般教養と専門とが並行するわけですね、科目としては。ですから一般教育から専門へ、専門から一般教育へとおたがいに寄与し合う関係というのは、たとえば臨床指導をインテグラルパートに考えれば、それを中心に交互にゆきかい、しょっちゅう交流はしているわけですね、教育される生徒の手持ちの知識は、そういう意味でインテグレート（統合）されいているわけなんですけれども、あるいは例のご専門のほうのブロックプランのアイディアみたいなもので、青年心理とか発達心理、臨床心理とうまくブリッジして、小児科看護なら小児科看護法という1つの系列を追って行くと、統合というのは割合かんたんに行くようにも思うんです。

もし、ある領域で一般教育と専門科目が全く水と油のようになったら終わりだと思うんです。一般教養科目が広がったことが、専門を勉強する際のじゃまにこそなればプラスにならないというようなことになると。そこらの考え方が、今、荒井先生の

お考え方とか、都築先生のお考えの中では、かなりよく統合できるというように考えてよろしゅうございませぬ。橋渡的な統合の準備が十分できているというふうに。

都築 できるといえるのはちょっとつらいんですけども、できるようにしなければならぬとは考えております。それでなかったら意味がない、両方ともに、専門科目、一般教養科目どちらにも意味がないと思います。

司会 そうしますと、先生方が新たにふえた教養科目の学習成果を、実際に看護学を勉強して行く上にどう活用して行くか、活用法を指導なさることが、いうところのインテグラルパート、インテグレーションのいちばんの要めになるところですね。編集部の第2の議題はどうもその辺に焦点を合わせているようですが。

本誌 文部省、厚生省が大幅に一般教養科目を導入したことの意味合は何か、教育行政側は一体何を狙っ



前田アヤ先生

ているかということ完全で意思統一できているのでしょうか。また最後の決定をした省側と現在の看護教育界の落差がなかったかどうか。その辺のところもぜひ1つお触れいただきたいと思うわけです。先生方の審議の過程で論議されたことがうまく盛り込まれて意図のとおりにならざりて来たかということなんです。

実質主義を採った新教科課程

司会 それはひじょうにむずかしい問題なんですけども、たまたま私、昭和37年でございましたか、看護協会看護教育制度セミナーというのがございまして、あのとき助言者として出ましたが、当時の先生方のご意見を拝聴しました。そして、こんどカリキュラム委員会に臨んで、いろいろ討議されて行く過程をみると、下からの熾烈な要請がありまして、それがある程度大学課程といえますか、短大のカリキュラムへの接近という形で、かなり具体化していると思うんです。それから、上からの行政指導という立場では、やっぱり行政一元化じゃないんですが、二元化して行くことによって、ひじょうにあいまいなままで残っている形を、いくらかでも改善しようとし

た、「学校らしい学校」という言葉を使役人は使ってましたけれども、単位制に切り換えること、それから、年間40数週の授業を35週に縮めて行くというフレームワーク(枠組)を上からたしかに持って来たわけです。下からの強い要請と上からの指導の2つの合流点で、妥結したのが今回の形の試案だと思うんです。そういう点ではひじょうに念願されていた強い要請というものが、かなりの程度試案の中で具体的な形をとって現われているとにらんでいるんです。

要するに看護学の基礎になる諸学がきれいに整理されて来たという印象を受けます。

これはいかがですか、森先生など大学にいらっしゃいますから、これ

は短大と寸分違わないという印象をお受けになる面もかなりあるんじゃないですか。

豊かな教育内容

森 拝見してみまして、科目と時間数だけではなくて、科目の中にもこういうものがある程度取入れて行くかという中に項目をお示しいただいてありますけれども、それを拝見しておりますと、やはり私どもの学校で、大体教育課程の中に入取れていた時間数とほとんど違わないんですけれども、ただ項目として、やはり最初に意図されたような一般教養課程の科目であって、そうして専門教育課程のある程度方向づけになるような項目が含まれてあるように思いますので、そういう中身においては、今まで私どもの学校でしております科目よりは、むしろたいへんにインテグレーションしやすいような、基礎としても科目としても取上げられているような気がして、むしろ新しい方向づけのほうが目まぐるしいような感じがいたしました。

司会 今のご意見を聞いてちょっと楽観的になったんですけれども、短大という名を取らずに、むしろ教育内容の面で実を取ったという感じがひじょうに強いのでございますが、これも1つのそういう制度改革への大きなテコ入れになるんじゃないかというふうに思います。

前田先生、立派な4年制大学を総帥しておられて、いかがでしょうか、そういう点での進歩は？ 高等看護学院がまだ、短大という形を名乗っていない現状において、内容的には短大を凌駕するところまで教育内容をひじょうに豊富にしたということは、まだ時間尚早であるか、それともその時期はとっくに来ているというふうにお考えになりますか、いかがでしょうか。

前田 時期尚早ということは私は

考えないわけです。これは整理されてこういうふうになったわけで、これ以前にもずいぶん学校によっては、いわゆる一般教養科目なるものが組み入れられていたように私は思うんですけれども。

荒井 私どももなんか、昭和25〜6年ぐらいの高等看護学院でしたけれども、音楽史とか文化人類学的なものとか、ここでは取上げられなかったものまで含めて教えていただいて、むしろそのほうが最初のうちは、たいへん楽しかったような気がして、いまだに、その時期に教えていただいた先生がいちばん懐かしいんですが。

教科運営上の難点とその打開策

前田 そういう考えを持っている方に指導されると、看護学校で教えていらっしゃる方も自然と、こういうふうになればこんどは学校らしい学校になって、教育の内容もよくなる——よくなるという言葉はよくないんですが、よくなるだろうと思っていらっしゃるんだろうけれども、今だって決して悪くはないですよ！ そうして、それぞれ思うように自分たちの望むような専門職業教育をやっているんじゃないんですか。学校らしい学校になると余計しばれるということはないでしょうかね。思うようにできないという。今までのほうが自由でしたよね、ある意味では。

だけれども、これからは学生が「35週ですよ」といわれたらどうするかということになると、よほどしっかりしてない。

司会 非常勤の先生なども、従来のようにのんびりした休講はおそらくできないでしょうね、やったらカリキュラムがひじょうに運営困難になりますね。

前田 35週で、これを入れよう

前田 だから、あまり学校らしい学校とか、だれがそう考えたんだろうと、私はときどき思うんですが、学校らしくない学校で教えてるなんてね。

司会 それは単位数とか、年間開設される授業日数とか、そういう点で多少変則的だと、公教育に比べると、その点で、役人はかんたんに、もう少し学校らしい学校をというワクをひじょうに強く意識するんですね。行政指導の立場から当然だと思うんですが、私どももちょっと引かなかったですね。その言葉を聞いたときに、「こんちくしょう」という感じはたしかにいたしました。

と思うと休講なんかできませんよ。

都築 ですから専任講師も少ないし、ひじょうにつらいところだと思います。いちばんこの辺がつらいところですが教務としては。先生がおっしゃったのはそこだなと思いました(笑)。

司会 ムリの最たるものはそこに来るんです。

都築 今の週数でも、専任講師が少ないということ、一般教育でしたら、大体学校の先生でいらっしゃるから、教育にたいするお医者さんの理解がないというわけじゃないんですけれども、診療を持った先生がひじょうにたくさん占めていらっしゃるから、それとの組合わせで学校の教育課程の運営がひじょうにつらいところでございます。

必要な医療への関連づけ

司会 その点、打開策になるかどうかたいへん疑問ですが、いわゆるカリキュラムの内容面でのムダの排除ということから集約化を考えることも、この際必要になって来るんじゃないか。一般教育のバラエ

ティがふえた、ふえたと喜ばないで、内容面でオーバーラッピングを防いで行くということ、たとえば臨床の先生の講義と専門職の方の講義とで、何々科看護法という中身が多少オーバーラップがあるという場合、少しずつ削ってといえますか、なにかもう少し、広域のカリキュラムに徐々に修正を加えて行く、内容論ですから、何をいつどう教えるか、何をの次元で、まずそういう広域カリキュラム化といえますか、ブロードエリアにくくって行くことがますます必要になるんじゃないかというような印象を受けるんですけれども。だから、やっぱり心理学でなければタッチできないところ、そういうものがあれば、それは教育学、社会学に触わらないということですね。

私どもの関連領域でいえばそういう問題が真っ先に頭に來ますね。社会学と心理学、教育学なんです、文部省の試案の中に、教育全容のフレームが書いてあるんですね、私ちょっと責任を感じているんですけれども(笑)、えらいものを書きすぎたと、大体社会学でいったらメディカルツシオロジー、医療社会的なある種の傾斜をつけてほしいということ、あるいは教育学でいうと人間行動科学といえますか、態度変容論なんかも最近の大きな課題だと思うんですが、アーチチュードチェンジなどという領域が行動科学で出て來るんです。心理学でいえば臨床心理とか、あるいはコミュニティサイドのケアなど、社会心理学的に接近しないと、どうもただのマウスの実験ばかりでは、動物実験心理だけじゃちょっと困ると思うんです。そこらは多少ともカリキュラムに傾斜があってもいいんじゃないか、バイヤスが加わってもいいんじゃないかと思うんですけれども。

経済学についても、やはり厚生経済学的なニュアンスというものを相

当ふまえて行く、医療保険制度というような点を考慮して、リハビリの問題なんかもありましょうし、法学の場合も、衛生関係法規、厚生関係法規、そういうものが加味されて行かなければならん性質のものだと思うんです。ただの法制経済の解説ではちょっと弱いと思うんです。あとの、ほかの自然科学とか人文科学でも、自然科学で地学がふえたというのはまことに変だ(笑)と、よく聞かれてまして、教務主任の先生方にいつか、たにかの機会にお会いするとみなさんおっしゃるんですよ。やっぱり委員会のときの空気に、公害問題をひじょうに重大視しておられた関係で、公害と看護の問題、だから気象まで含んで、地学を入れるということが、5年10年先の日本の実情を予測するときにどうしても必要



都築 公先生

だという英断があったわけですね。これは医学方面のご専門の先生がお考えになったんですが、並列科目としてはちょっと違和感がありますね。

都築 あの時きもだいぶ論争があったところですね、これも(笑)。

視野を広めるための基礎科学

司会 統計学、化学、生物学、物理学と来て、(生物、化、物理の応用科学は医学もそうですから当然ですけれども)地学というのは何じやろうかと、私どもははじめ考えたわけです。

前田 気象学もそうですね。

司会 それとあと前田先生のご提案でした、自然科学の中に生活科学のようなものを入れたらどうかと。

前田 ニべもなく断われましたが(笑)。

司会 ここでは表立って乗って来ていないんですけれども、ひじょうに残念なことをしたと思う、あれが1本入っていたほうが柱としては筋を通しやすいと私は思ったんです。

前田 ですから、私が思いますのには、できればその学校、その学校で必要と思われるものを入れて行ってもいいんじゃないかしらと思うわけですけれども。

司会 そうですね、ただ自由選択

科目のような形にもせよ、「自然科学系列の所定単位に充当させることを得」ということで解決して行くことは、できないことじゃないと思います。

都築 選択の範囲外からも取入れる自由をのこすということですね。

司会 はい。森先生の大学などでは生活科学はどこかの系列に入れていらっしゃるんですか。

森 今の新しい分類の仕方ですと看護総論になりますけれども、そういうあたりで生活科学といえる全領域にでなくて、その部分的なものは多少取入れて行こうという程度でございます。

司会 やはり、そういう点では、まだ、いくらか地固めが早すぎたような感じでございますね(笑)、自然科学系列では。

前田 そうですね。でもやってみないことにはね。

荒井 教務でカリキュラムの合同

会議というのをなさいますね、各先生お集まりになって、そして重複の激しい、あるいは欠けるものを欠けないようにする、そういうようなところでうまく調整して、表面的には同じでも内容的にうまくバランスをとって行くということが、一般教養関係ではますます必要なんじゃないかと思いますか。

どう関わる隣接科学と看護

前田 ちょっとこれは看護に関係はないんですけども、ふつうの大学の一般教養科目というものと、それらの専門科目、たとえば文学の関係はどのようになっているものでございましょうか。初めに先生からご紹介いただきましたような、一般教養科目が土台になっているように考えていらっしゃるんですか。たとえば2年間は全部一般教養科目をやる。

司会 ひじょうに不徹底な大学もあるし、要するにカリキュラムの管理がひじょうに充実している大学になりますと、一般教育部と専門学部というものをセパレートしませんが、常にうまく連繋を取るように体制を組んでおりますから、1年からどこか専門科目をおろしますし、理学部の例では、1年で一般教養科目と申しますと、文学、歴史、数学、物理、化、外国語、これはどんどんふつうの大学と同じように開くわけですけれども、2年になりまして初めて、哲学、倫理、法律、経済、それから専門講義で生物学が入る、そういう形で徐々に進行して行きますから、決して水と油のように切り離してないんです、本来の考え方は。ゼネラルカルチュアについて弱くて、たとえば看護を勉強していて、外から看護を見るという力がないということと同じことで、このごろは視野の狭い専門家は無用な時代だということですね。むしろ隣接科学の諸原理で

自分たちの専門の問題についてどうかかわり合いをしていくかという、この接点をよくにらんで行くと、そういう意味で、一般教育の充実にひじょうに力を入れております。だから統計学が弱ければ、衛生統計に入ったときに、すぐに一頓挫してしまうということがありますし、あるいは看護調査、看護統計に入ったときに、データ処理ですぐ壁にあたるということもありますでしょうし、やっぱりノコギリとカンナみたいなものだと思うんですよ、統計学というのは。それから心理学にしてもそうだと思うんです、カウンセリングの場になると、やっぱり人間理解という点、精神現象の法則性、それをふまえていないと、ただ形だけのカウンセリングでは弱いですからね。

学生のニードはどこにあるか

都築 あのと、だいたい一般教養科目が問題になったんですよ。

司会 心理学なんぞは、院外講師が教える科目の中で、一般教育のものですけれども、いちばん人気が高いんですね。

荒井 院外講師というのがいちばん人気がありますね。

司会 ついでで社会学でしたか、それから外国語では英語なんですね。つづいて日本文学を含む文学ですね、そのあとに芸術的な音楽とかで、教育学なんていうと、さらにもうちょっとあとから出て来ます。それでニュートラルなところというところ、ドイツ語、タイプというあたりなんです。ずっと下へおりちゃいますと、衛生法規とかお茶とかお華とかいう習い事がちょっと出ておりましたね。そういうものは無関心、あまり乗り気がしないですね。やっぱりそこに出ている学生のニーズというのは割合正直じゃないかと思う。こんなことを申上げるのは、一般教育の系列は、

前田 ありがとうございます。

司会 この辺で、どうでしょうか、学生さんの学科にたいする興味調査を、ここにいらっしゃる荒井先生、都築先生、その他2,3の方でなさいましたですね、そのレポートを送っていただいて、医学書院からたしか「看護学生調査」という本になって出ていると思いますが、あれを見ますと、1年あたりの学生さんと2年ですか、関心を強く持つ科目の系列が美事に整理されているんです、調査データで。ここへ細かいのは持って来なかったんですけども、あれはひじょうに参考になると思いますね。新しいカリキュラムの、何をどういう順序でというときの、カリキュラム編成の1つのヒントになると思います。

個々の一般教育科目がどう教えられるかということよりは、シリーズそのものに意味があって、こういう順序で、なにがどう編成されて行くのか、ですから、見方によると、そういう関心度、ニーズに応えるために魅力のあるカリキュラムを立てて行かないとまずいんじゃないか。これからの若い人の基準に合わないんじゃないかと思います。いうなら、もっとアトラクティブな一般教養科目の編成があってもいいんじゃないか、1年、2年、3年とカリキュラムを編成するさいの学科目の提供の順序ですね、ずいぶんいいデータがあるんです。別に学生の意味だけからカリキュラムを編成するという変則的なことじゃなくて、カリキュラムが無味乾燥だみたいなことをいう学生もいるようですから。その点では、当のご本尊が何を要求しているかということが大事じゃないか、教わる側のニーズは、たしかそんな順序で出ていたと思いますね。心理学、社会

学、英語、文学、音楽とかが人気が高いんですね。

前田 そういうものを教えられるということで、学校らしい学校を感じるんですね(笑)。

司会 それはふつうの一般の大学の学生でも同じじゃないでしょうか。

教養は“生きているもの”

荒井 なんか、若い人たちが持っているイメージというのがあるんじゃないでしょうか、学校教育に。

前田 うん、そうよ、だから。

荒井 だから、そういうものになるだけ合わせるような形でカリキュラムデベロップメントというのをたえず考えれば、やっぱりカリキュラムというのは、私もつくづく教育を業としたときに、その時代の社会の問題とか、事項とか、いろいろな問題が常に絡んで来るひじょうに“生きているもの”だという印象を学んだんですけれども。

司会 今回の試案はいかがでしょう、数年たつと、少しアウトオブデートになって来ますでしょう。

前田 来ますでしょう、私もそう感じるんですよ。去年よかったから今年もというわけには行かないんですから。

司会 それで、個々の職業調整なら職業調整という科目の中に新しい教材を取入れますけれども、これが5年にいっぺんは中身をゴッソリ再編成しないと、もうニーズに応えられない、そういう時代です。アメリカの有名なカリキュラムの学者がいうんですね、専門職業教育に限っての問題ではないけれども、『カリキュラムは5年に一度改変しても決して多すぎない、現代の教科目の教材にとっては、そういう時代が来ている』と、いうなら、情報爆発時代ですね、インフォメーションのエクスプロージョンみたいな、だから固定したフレームでじっとしていると

いうのは、その学問が遅れている証拠だというんですね。

前田 私ども、自分で受持っている科目でも、去年こういうふうだったから今年もそれで行くという、ぜんぜん反応が違いますね。

司会 そうでございましょう。衛生統計のデータを素人が見ても、時々刻々動いておりますね。

前田 ですから、並べてみて、順序を変えたり、ぜんぜん違ったものと入れ替たりするということは私どもも考えますし、衛生看護の科目だって同じことがいえるんですね、年中同じことを教えていてはぜんぜんダメです。

都築 それは今までの看護教育でもいえるんじゃないでしょうか、指定規則その他は変わらないんですけども、実際中身をあけてみるとずいぶん変わっておりますね。

司会 そこで無際限に膨れあがっている情報量を一体どう処理するかということになりまして、カリキュラムの編成ですか、やっぱり基礎原理は基礎原理としてしっかり押えな



森まさ子先生

ければならんと、それにプラスアルファとして、ひじょうに前向きになりますけども、新しい情報を『知識としてどう処理するか』という、さっきいった処理のスキルがものをいうと思うんです。そのものをいわせる処理の法というのは一般教育のベースが強いかわいから決まっちゃうわけです。

都築 そこがづらいところですね、ほんとうに。

高度、増大化する知識とその処理

司会 まったく情報爆発時代です。そこで専任教員として新しい科目を指導する際に、どういう受止め方をするかですが、一言でいったら、5年に一度頭の中を詰め替なければならぬそういう時代は来ておりますね。学問の基礎原理についてはどうか知りませんが、周辺領域の情報になりますと、5年に一度ずつ更新しなければ時代から振り切られると、そういう時代だと思います。大体、技術革新とか、社会変革というようなエクスプロージョンがものすごいですからね。あっちでも、こっちでも。そればかり追っていたら大脳が爆発しちゃってダメなんですけれども、基本になるのは、そうい

う知識の処理の技術のようなものを、しっかりした原理をふまえて安定した形で看護の学力として定着させるということが、将来のいかなる変革にたいしてもふんばりがきく強い転換能力を養うという点で、こんどのカリキュラムの型も当然すぎると思う。新カリキュラムの拡張は当然のことだといえますね。

前田 こんどは、これをいかに活かして行くかということが看護学校の専任教務主任の責任でしょうね。

司会 そうでございませう。ご専門の何科の科目でも、お1人が1学科を完全に追いつくせるということができなくなって来るんですね。そうすると主な先生と、それに従属す

る先生とがいて、チームティーチングしないと職業調整みたいな科目になると操作できないという時代が来ているわけですね。だから、そういう意味では、ひじょうに専門の分化も激しいけれども、またインテグレーションという点では、集中拡散のくり替えしがひんばんになって来た。これを再編成と統合とっておりますが、共同教授法（チームティーチング）で逃げるといふ変化の激しい科目がたくさん出て来ると思います。ですから、指導する範囲の各部分を、臨床のA婦長さん、B婦長さん、C婦長さん、専任教員1人と、それで4つのパートにすると1学科ができあがる、そういう時代がもう来ているんですね。学科内容によっては、お1人が学年度の初めから終りまで特定の科目を1人で終始教えて行く、ということは専門科目の場合はだいぶんむずかしくなって来ますね。

都築 そうですね、だいぶ前からそれをやっていらっしゃるんじゃないですか。

森 そうですね。

新しい教育形式を

都築 幾人かに分けて、だれかが中心になって取りまとめ、専門課程で合同化して行く、それはやられておりますね。いわゆるチームティーチングでやっているわけですね。

司会 大体驚きますのは、一般のふつうの学校の教育ですけれども、小学校の3,4年で、昔だったら大学でしか扱わない集合論というのがありますね、数学のほうですけれども、集合論のひじょうにやさしい形のものが教材としてどんどんおいて来ております。大学教材がだれにでもわかる平板な知識として小学校の3,4年の子供の教材にすかっとおいて来ております。だから指導者がぼんやりしていると突き上げられる、そう

いう時代が来ております。現在日本でも SMSG といいましてアメリカ式の新しいカリキュラムの数学のテキストを見ましても、物理学では PSSC ですか、あれですばって持って行かれると、ひじょうにたかい水準の内容がやさしい形で入ってくるんですね。つまり、テコ入れがぐんぐん下から来るんです。5年に一度の頭の詰め替じゃ遅いぞということになるんですね、ひじょうに新しい教育をうけた人たちが、それをすっかり吸収して高等学校を出てやって来ますから、よほどしっかりしないといかんのではないですか。

荒井 たとえばアメリカなど、ヨーロッパの新しいカリキュラムで一般教養科目、とくに特定の大学と一般大学、総合大学と連携教育という形で、何々大学の教授陣が揃って何々看護学院の一般教養科目を持つというような形をとっているところが

あるんですけども、日本でも将来そういうことを、たとえば何々高等看護学院は、その近くにある何々大学と協力体制を持っているという形なんかは考えられないものでございすか。

司会 これは公式じゃないんですけども立教と聖路加はだいぶ先生の往き来が激しうございますね。実質的にはそういう面の操作が始まっているような感じがいたしますね。

前田 そうですね、お宅からは心理学、生物学の先生が来ておられますね。

司会 社会心理学の先生もいっておりますね。やっぱりそれがいちばん実施しやすい可能な体制でございすね。ある特定の大学をメインな大学として丸がかえにしちゃって、あと事余のものをよそから持って来ると。

周辺学習領域の基礎固め

荒井 あまりあっちこっちから種々様々の先生がいらっしゃると、教務が電話かけるだけでもたいへんじゃないかと感じるんです。実際問題として、いちいち交渉に歩かれるだけでも何ヵ月分かの努力が吹っ飛んじゃうような感じがしますから、できるだけ……。

前田 だからそういうひとところだけだと、その先生が海外留学をなさるときも、代わりの先生を送って下さるでしょう。

司会 ところで、話がかわりますが、下のほうの学校では、みんな螺旋型カリキュラムといいまして、同じ日本史でも、小学校で習い、中学で習い、高等学校で習うというふうに、螺旋型で同じことを勉強しているんですね。そうして大学へ来て歴史をやると、また同じことをやるんです。ただ水準があがっているだけ

なんです、足利尊氏が4回出て来る教育を受けているんです。ある意味ではムダがあるんですね。

都築 私どもの学校ですと、よく学生が、中学でやり、高校で習ったのと同じような教育だと、期待していたのというふうなことも科目によっては出て来る現実がありますね。その辺のところを、これも教務のあれでございましょうけれども、まことに、どういうふうをお願いしているのか、お願いする側も、当然勉強はしなければならいんでしょうけれども、たとえばここに出ております教養科目にしても、内容もそれぞれ広うございすので、その辺、限られた時間で教えていただくことは、私ども不勉強で、なかなかむずかしいことですが、一般教養科目を活かす、活かさないの力があると思います。

荒井 若い人はとにかく先生がおっしゃったことだけで、ひじょうに浅くそれを受けとめてしまって、やって来たじゃないとか、同じだとか、レベルが低いとかということでクレームをつけますけれども、やはりアサイメントの学科だとか、あるいはアプローチを考え直してみるとかということで、やっぱり螺旋の次の段階に来ているんだということを意識させなくちゃいけないですね。

都築 内容はそれこそ足利尊氏が4回出て来ることはなかったけれども、それを感じさせるというような教育内容というものがやはり問題になって来ると思うんです。それは先生がよくご存じのはずだと思うんですが、ございますけれども。

荒井 アメリカの大学へ行きましたときに、すごく自然科学がとくにレベルが低いんですね。たとえば物理にしても、化学にしても、みんな高等学校でしたようなことを大学でやっているから、こっちはバカにしたりしましたけれども、やっぱりやって来たようなこととは——言葉が違うことが大きなハンディキャップですけれども、学生にそこからなにを取らせるか、自分たちでそこからなにを吸い取らせるかなんていうことは、やっぱり高等学校のレベルでないレベルでやっているんですね、最初のうちはなかなか気がつかないんです、数式がかんたんに解けちゃったり、物理だってアメリカの学生よりもできたような気がしていたんですけれども、やっぱり教育というのはそういう表面的なことだけじゃないということをあとになって気がついたんですけれども、たしかにそれはあると思いますね。

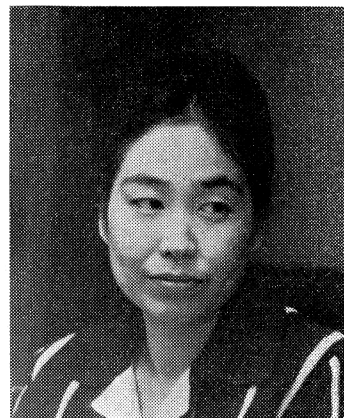
一般教養を活かす道

司会 一言でいうと、狭い専門性を脱皮させるという狙いがある、もう1つには先ほどのような転換能

力の向上とといいますか、どちらの方向にも転進でき、こと看護に関しては、そういう強いプロフェッショナルナースを養成するためには、一般教育は当然、やや拡散的な形を取らざるを得ないというように思うんですが、いかがでございましょうかね。

そういっちゃ叱られますけれども、社会科学系のお遊びの短期大学、そういうところの内容からみると高等看護学院の内容のほうが、私は中身としては充実していると思うんです。だから、名前はどうでもいいから質の点で、もう少し基礎固めをしっかりと周辺学習領域をコンクリートに固めるということがやっぱり必要なんじゃないでしょうか。

前田 先生がおっしゃるとおりだと思います。そのために、私、学校自体としてももう少し学生が講義を聞いたらそれについて勉強するという言葉は、安易な言葉だけれども、自分で考えてみるファシリティが必要ですね。それについて読むということで、それを深める土台になるんじゃないかと思う。習った、それでおしまい、ノートをとった、それでおしまいでは、やっぱり私たちが考え



荒井蝶子先生

ているような点までは行かないと思いますね。だから、今、ふつうの看護学校だと図書室というのは割合整備されてないわけでしょう。

都築 いちばん整備されていないものの代表でございますね。

前田 ですから、そういう意味からは、ほんとうに学校らしい学校というのは、ただカリキュラムばかりではないということで、カリキュラムの運営もさることながら、施設という、ひじょうに手近なところから1つずつ充実させて行くことが必要じゃないでしょうか。

単一科学では泳げない時代

司会 それでないと、新カリキュラムにたいする批判として壁に書いた餅だと悪口をおっしゃる方もあります。たしかに現実との調整の行き届いてない領域がまだございますからね。

都築 ですから、今大体45週ぐらいみなさん使っていらっしゃるんじゃないでしょうか、それを、たとえば40週にした場合、そこに5週の時間の余裕が出て来る、それを学生が本当の意味で、どういうふうに使うかということがその点にかかって来るわけですね。そういうものがないといい芽が育って行かないよう

な気がしますね。

司会 そういっちゃなんですけれども、新カリキュラムが、もし形どおりにきちんと動くという体制を、数年後に予測しますと、看護研究の水準もある程度あがるようなことが期待できるんじゃないか、リサーチのレベルがあがるというような予測をしてみたいと思うんですが。

荒井 そうやって10年20年積みあがって行くと看護体系が、ある1つの体系化したものになるんじゃないか(笑)。

司会 外国の場合みたいに、相当時間を貸し与えないと、一気には行

かないですね。

前田 それはそうですね、私もそう思います。ただ自分たちのやっている看護というのが学問なしにはやって行かれないということもハッキリするでしょうし、ただ技術を尊重した昔とは違っているんだと、それから自分たちの看護というものを、どうやって伸ばして行くかという伸ばし方というのも自分で考えられるようになっていきますね。たとえば鈴木先生がおっしゃったように、外から自分たちのやっていることを眺められるという能力がたしかにつくでしょうね。壁にぶつかってもどうにもならない、こういうふうな制度が悪いんだ、何とかが悪いんだというような繰り言でなくて。

諸科学とのつき合いの中で

司会 個人もそうですけれども、他人があって自分が向上するようなもんでしてね、諸科学のつきあいがみんなそうだと思うんです、このごろは。ひどく遅れていたりひどく貢献すべきところを手をこまねいていたり、そういうことがおたがいに起きている時代ですね。1つのものを研究するときには総合プロジェクトの時代で、単一科学では切り盛りできない時代、とくに社会科学はそういう気がいたします。

都築 たしかに今までの私たちは、ベースが弱いばかりに、ずいぶん悩みが多かったと思います。小さいところでグルグル回っていた、壁の中に閉じこもってしまっていたと思いますから、5年先に、また次の段階でこれが変わって研究者がだんだんできて来れば、そういったような問題、これも楽いて行けると思いますけれども、そういう人たちを作って行かないことには。ただ、今まででは歎くばかりでたいへん申しわけないことですが(笑)。

司会 森先生の大学などは、大学

として特殊な教育目標をお持ちになりますでしょう。特殊ということは、先ほどいった中心になるような指導理念といいますか、同じ看護婦さんを養成するだけけれども、ただの看護婦さんじゃないと、こういう特色を持っているという、ある点ではひじょうに強いとか、あるフィールドに出したらひじょうにベテランだと、そういうことはぜんぜんないという養成機関はないと思いますが、多少とも重点の置き方というものがあると思いますが、それと一般教育のからみ合いはいかがでございましょうか。なにか補強したり、あるものは削っちゃったり、そういうようなことをなさっておりますか。

森 今の段階では一般教育の中で

“人間づくり”が最終のねらい

司会 教育の課程はもちろん充足していてすっかりしたカリキュラムだけれども、学科の並べ方をよくみていると、科目の提示の順序なり、あるいは今いうようないくつかのエキストラカリキュラムのところで、かなりバイヤス(くせ)をつけているということですね。それを取っちゃったら香の抜けたサイダーみたいなので、さっぱり(笑)……、カリキュラムというのは、やっぱりそういうものじゃないかと思えますね。中心生命がそこにしっかり定着しています。

前田 その代り、いっぺん決まったものであっても、それぞれの学校の特徴が盛り込まれているんじゃないですか。

都築 現実にはそれぞれ出て来ているんじゃないでしょうかね。

司会 それはやっぱり一般の大学の場合でも必ずありますね。倫理学をやるときに、ミッションの大学ではキリスト教的倫理を主体にする、それがある意味でコアになっており

そういうふうな科目を補強している項目としてはとくにございせんけれども、それ以外に、たとえば赤十字事業なり赤十字の原則、赤十字関係の条約その他に関する研究をしましたり、それから、それをこんど実際化する場合の方法としての課外活動の実施とか、急救処置とか、そういうことにたいする科学と実践の両方から強くなるようにというふうな科目は入れておりますけれども、一般教養課程の中に特別に加えた項目というのじゃなくて、別口のような形で入れております。

司会 それは扇でいったらカナメの位置でございましょうね。

森 はい。

ます。すぐ礼拝行事につながるとか。一般教育でただ倫理をやっているなという、それだけじゃないんですね。むしろそこにものすごい重点がかかっているんです。こいつを外しちゃったらカリキュラムは全部ディセントラライズして、バラバラになっちゃうということもあるんです。

前田 うちも宗教の原理はあるんですよ。

司会 やっぱり人間作りが最終の狙いになりますから、どうしてもそういうところで1本クサビが打ってありますね。

本誌 看護学校の教務主任、あるいは専任教員が先ほど来のお話のような意味合いで一般教育科目の導入を理解すること、これはよくわかるんですが、その一般教育科目を教える講師の先生方に、やはりそういう意味合での講義をしてくれということを要請するのもしないのか、そこで教えられる法学というのは、いわゆる法学の概論的なもの、法学の入門的なもの、それだけでいいのかど

うか、その辺のところは、だいぶ私の編集部にも問題を提起される読者が多いわけです。どういうふうにかこれを受けとめればいいのか、もう1つは、地域的な問題で、先ほど荒井先生のおっしゃいました駅弁大学すらないわけです。そうすると、出て来るのは高等学校の先生であるとかこういう場合の専門講師の求め方、これは即物的なことになって現われて来ているんですけども。

教え手の問題点

司会 ペースとしては、第1のアプローチは法学を例にとれば、法学プロパーの領域での知識の処置法が理解できれば、それでまず目的を充足したわけです。プラスアルファとして、でき得れば看護への傾斜をとということを欲張って考えるわけですね。

前田 でも、その先生がそれに適当でなければ、また別にその方面は時間をさいて使うという手もございませうね。

司会 そうですね。それから専任の先生はゼミをお持ちになる時間が相当あるようですね、まさにゼミというのは頭の体操なんで、看護学の中に閉じこもってじゃダメなんですね。隣接的な領域のもので引っかかるのあるものは徹底的に調べさせるという拡散的な学習を促進するにはゼミナーがひじょうにいいんですね。ですから専任教員の先生の腕の振いどころにはなと思います。

本誌 要するに看護学校で教える法学であり、心理学であり、教育学であるということなのか、法学プロパー、経済学プロパー、社会学プロパー、その専門家が来て教えるものを受けとめ手が受け止めるのか、そこなんです。

司会 受け止め手である学生は、もちろんそういうフレームでとらえて行くことは必要でございますが、

これは助成しないことにはできないんですね。助成者はやっぱり専任教員の先生であり、臨床のスタッフだと思います。5年に一度の頭の詰め替なんていうロクでもないことをいったのは、そこらがひじょうにフレキシブルでないと切り盛りできないと思います。

本誌 いわゆる私どもの看護教養新書などで当初考えていたものとだいぶ違うということなんですね。あの狙いというのは、看護のためのとか看護のためのなんとか、看護のための心理学、看護のための社会学、そういうものじゃないんですね。あくまで心理学プロパーであり、経済学プロパーなんですね。

司会 はい。

前田 でもアメリカあたりでは、ずいぶん看護婦のためのシリーズだとか、いろいろなものが出てますよね。

荒井 アメリカの1つの傾向では、

これからの専任教員のあり方

前田 私、あまり不思議だから、「日本はお医者さんに教えてもらうんだ」といったら、「どうしてか」というから「やっぱり専門的な医学ならばお医者さんでしょうね、どうしてお宅はそういうふうになさらないんですか」と聞いたら、やっぱりお金がかかるからだといっていましたね。

荒井 それと、ひじょうにムダのないカリキュラムというものを組もうと思いますと、やっぱり外の者が来てやったんじゃ重複があるというので、看護婦さんの教授陣の専門を持って、その領域は教えてつないでいったほうがムダがないということをおっしゃいますけれども、それはアメリカ的な合理的な考え方があると思うんです。

都築 私がさっき申し上げたのもそのことだったんですね。看護婦さ

看護婦さんで経済学を教えられる人とか、あるいは看護婦さんで化学を教えとかという形になることがいちばん望ましいということを何年来かいついていらっしゃる学校もあるようですけれども、私はむしろ、今、鈴木先生のおっしゃったような形のほうが広さがあるというか、いくら看護婦さんがマスターのプログラムの化学をとったり、経済学をとったり、その道の専門のようになって教えられても、やっぱり狭くなって来るので、一般教養科目のほんとうの良さの1つに広さというか、専門家がプロパーの生き生きとしたものを教えるという感じのものを持っていたほうがいいような気がして、アメリカの行き方は私、その点はあまり賛成できないんですけれども。

前田 医学でも看護婦さんが教えるんでしょう。

荒井 はい。

んが教授陣になって教えたほうがいいと、私も今までそういうふうに思っていて、将来そういう人が出なくちゃいけないということで来たんですが、だんだんこのごろになって、果たしてそれでいいものだろうか、どうだろうかということを考えたものですから、先ほどちょっと申し上げたのはその辺のことだったんです。私も荒井先生の考え方には動いて来て賛成なんです。

どこで腕振る専任教員

司会 諸科学と看護学の橋渡しのところで腕を振るのは、専任の先生、臨床の指導者ですね、そういう方の腕の振り場所といたら、ゼミナーが1つ、それに看護学演習、もう1つ臨床実習ズバリですね。もう1つはマイナースタディを2年ぐら

いから開始すべきだと思うんです。そうしてメイジュアなものを3年あたりから与えて、看護学を小研究と主な研究に分けて、そうしていくらかインテグレーション統合課程でまとまりがつく。3つでしょうね、ジョイントは。

都築 鈴木先生のおっしゃる臨床指導というのは、いわゆる私たちがいう専任で学校出の、いい、臨床の場にも出られるという人たちが備わってそれができるようにならないと、それができないわけなんです。今の形態で、臨床の場の婦長さんでは、主任さんですね。その人がしますという場合に、今までの悩みはその辺にあるわけなんです。そういう人たちが協力して、そうしてまた統合できる専門の人がほしい、そこまで出て行くだけの人がほしいですね。それは質の問題になり、けっきょくは専門教育をいかにこなして行くか、けっきょく一般教養科目をふまえた上でそれが臨床の場におろされて行く教育の姿というものがととのってないと看護教育にならないですね。

森 そうですね。

司会 臨床実習指導などで、評価がありますね、あれなんか完全にカリキュラム委員会が料理できるんですね、婦長会議（教育部会）をやっているらしいですね、あそこで切り盛りできる問題なんです。ところが、なかなか熱意がなくてそこまで問題を持って行かないんです、現状は。だから評価は指導過程の1つのパートだと思うんです。カリキュラム会議の中で十分料理できるんです。月に1回ですか、2回ぐらいですか、教育部会をお持ちになるのは。

前田 婦長会議というのは毎週1回あります。

司会 その中でいくつかの問題において教育部会的なものを持たれるわけでしょう。そこらでよほど調整

機能というのはきくと思うんですけども、外からみてますと。やっぱり業務量が多いためか、あるいは会議の中でものをいっちゃうと管理者にブチ当たるようにあるというのか、なんかあまり活発な発言がなかったりして渋滞しているように思うんですが。

荒井 教務の先生というのは、いつも臨床の場では遠慮しいしいというような態度がわりとあるんじゃないですか。

都築 遠慮しなければならぬ因子が多すぎるんですよ、現段階では（笑）。

荒井 やっぱり聖路加のように厳然とした病院の目的の1つに教育が

ある場合には違うと思いますが、一般の付属看護学院では、とくにその辺なかなか理解していただけないんじゃないかと考えます。とくに地方のわりと小さな学院などに行ったとき私、感じましたんですけども。

都築 現場に対する業務量が多いわけですよ、診療といっしょです。もちろん能力ということに関係すると思いますけれども、看護というものとさらに私たちが期待する教育的機能、学生にたいする教育機能を持ちたいという意味と、やはり1人の人の分量としては現状では多いんじゃないかと思います。もちろん個人差もあると思いますけれども。

確立したい専任教員の位置

荒井 こういう教育を受けた人が主任と婦長になる時期には、ひじょうに将来は学生の臨床における教育的な学習というものは期待できるわけでしょうか。

都築 今よりはたしかに期待できると思いますけれども、やはり看護婦の持っている業務量を考えて、そういった面とあわせて1人の業務量として考える時期にならないと、プラスアルファで教育をするという形が今のところ多いんじゃないでしょうか。

前田 もう1つは、折あるごとに暴言を吐かしていただくんですけども、看護学校の先生が、もう少し病院に行ったときに、病院の臨床の場で援助者になり得るぐらいの技術と知識を持つということが必要なんだと私は思うのよ。「ああ、あの方がいらしたかしら、これを聞きましよう」とか、臨床の場で、ひじょうにむずかしいことがあったら、あの先生を呼んで下さいというぐらい信用されれば、ずいぶん違って来ると思います。

都築 たしかにそうだと思うんですよ。

前田 そうするとものもいえるわけでしょう。

都築 その場合に、やっぱり専任教員の、こちらの数もあるわけですね。

前田 数ばかりじゃないと思うのよ、やっぱり専任教員は3人だからできない、できないとおっしゃるけれども、その3人の方を病院で働いてもらって、こちらの方からみればひまに見えるのよ。

都築 臨床側からみればひまに見えるんですね。

前田 もう1つは、この3人の方が熟練者であり、ひじょうに勉強している人であって、何を聞いても答が出る、答が出ないまでもリソースするということが必要だと思うんですよ。これはあそこを見ればいい、このことについてはこれを見ればいいと、こういう資料があるというようにみんな提供できるぐらいの人間が学校にいるということがひじょうに関係をよくすると思うんです。

都築 たしかにそういうことはいえますね。

専任教員に要求されるもの

司会 全教育課程をとらえて、大掴みに、図書館でいったらリファレンサーみたいな役割りが、かなり敏捷にできる方というようなことですね。臨床経験を総合学習という位置づけをしたときに、どうしても教務の人たちにこれを要求したいと思えますね。

前田 お思になりますでしょう。

司会 やっぱりリファレンサー的な機能を持っていないとダメですね。

都築 どうしても専任教員として必要ですね。

前田 それで呼ばれて行って、この患者にこういうことがあるんだけど、こういうときにはどうしたらいいか。といわれたときに、ああ、このことについてはここに資料がある、これをご覧下さい、あれをご覧下さいといえれば、お医者さんも看護の面では看護婦のチェが必要なこともあると思います。そういうふうなことが学校と臨床の場と交流があれば、ずいぶん違って来ると思うんですよ。

都築 それはとても大切なことだし、こんごも……。

前田 しなければならぬと思えますね。

都築 それで私が申し上げますのは、3人で3人でということで、けっきょくは教務業務の処理の仕方にかかって来ると思うんですよ。その人たちが、ほんとうに看護教育の業務だけできればいいんですけれども、付属病院ではそういうわけには行かないので、そういうふうな資質を専任教員に持たせるためには、それだけの時間と勉強するチャンスを与えなければいけないんじゃないか、ある程度こちらの管理の立場からいえば、そうするためには、教務主任を人

て3人ではとても、今の事務員もいるかいなかかわからないようなところでは。それは私はムリだと思います。いくら能力があっても、能力というのは磨いて行かなければいけないと思うんですよ。そうするには、どうしても私、もう少し専任教員が昼も夜も勉強しっ放しでかじりついていなければいけないという努力の中から生み出して行くような、そんな時期はもうそろそろ脱皮していいんじゃないだろうか、そういうふうには私は私の立場で念願しているんです。そういう知識はほんとうに必要なだと思いますし、私の学校でも曲りなりにもそれを育てるために一生懸命やっているんですけども、ほんとうにみていると必死でやっているわけですね。夜帰ってもいっぱい本を抱えて、自分の能力を伸ばすの

にフルに自分の時間を使ってやっているわけですね。そんな厳しい中にある専任教員にもう少しゆとりが欲しいと思うんですよ。

司会 こんなことはいかがですか、臨床のほうのスタッフの方と、教務のスタッフの方が、ある一定のクールをおいて人事交流というのをかなり頻ぱんにやって行く。もう1つ、その補填として職務のローテーションをよく考えて、職務巡回ですね、ローテーションをきれいにやって行くと、あるクールまでいったときにそれを起用して行く、そうすると全体の人事管理政策としてもうまいと思うんですよ。真ん中の1年は専任教員としての研修がどうしても入りますから、ジョブローテーションと養成機関の教育と2つをふまえてやって行くということは。

教育養成と病院の看護管理

都築 私も10何年それやってみて来たんですけども、実際にはチェンジするチャンスをつかむというのはひじょうにむずかしいんです。病院の中のポスト、それに、こちらへ連れて来たポストと、それがひじょうにむずかしいんです。もうあの人そろそろと思うころ家庭に入って、そこが抜けて来てしまっ、ひじょうにムリな人事をしなければならぬということ、もう少し育ちやすいかと思いましたが、なかなかむずかしいですね。

司会 10のものを6ぐらいしか押えてないという状態でもリファレンサー的なトレーニングはぜひ必要ですね。でないと、現実には完璧な状態になるのを待っていても。産業界ではよくキャリアデベロップメント（経歴管理制度）と職務巡回をやっている。年に1回ずつ自分の進めたい方向への自己申告をさせて、そいつをデータとしてその人のキャリア

を伸ばすという方向に人事政策を持って行く。そのために教育をしっかりブリッジしているわけですね。だからキャリアデベロップメントというのは、文字どおりスタッフの経歴を管理し、伸ばすためにしっかりやるわけです。それがけっきょく教員養成でいちばん大事なことでないでしょうか。

荒井 それはやっぱり病院管理というか、病院看護管理の中の大きなプログラムの1つに入らなければいけないんじゃないでしょうか。教務側だけが一生懸命それをしててもできないことで。

都築 それを把握しなければできないですね。

荒井 病院がある1つの方針を持って、病院看護全体、学院を含めた1つの人材開拓みたいなことをやらなかったら、とても教務だけではできないんじゃないかと思います。

司会 教育界はいちばん遅れてい

ると思いますね。

都築 そういうふうにしようと思いましたが、どうしても最低 5, 6 年は教務にいませんとチェンジをしていくことはひじょうにむずかしいと思うんです。同じレベルのものをずっと維持して行くためには。

どうして良い専任を育てるか

司会 視野の狭いスペシャリストを作ることはかんたんになっちゃうんですね。そうじゃなくて、横にらみの広い人を作るのはたいへんなことですよね。

荒井 それがけっきょく今までの看護教育界のベーシック（基礎的）なものが足りなかったからそうやって来たんだと思いますね。

司会 一般教育の効用を説きすぎるかも知れませんが、それがあればひじょうに足場は強いと思いますね。

本誌 今、荒井先生おっしゃいましたそのことは、何も学院を持っている病院の看護管理の中に含まれないといふことだけじゃないと思うんですが。

荒井 大きくいえば日本の国全体ののだと思いますけれども(笑)。

本誌 学院をお持ちになっておられてたまたま教職にあられるために、ほんとうに分散された小さな形のところで、ものすごい悩みとか、ほんとうに解決したいことをあがいておられるような感がそばで見えて強いわけで、たいへんお気の毒だと思うんです。養成だけがものすごく大きくなりまわっていて、そうして育った学生は学院を持っていない病院へどんどん入って行くというのは徒労もいいとこだと思うんですが(笑)。

司会 消耗率が高いということが看護教員養成についての最大のネックですね。ですから常にフレッシュマンと対決しているわけです。です

からとどまるところを知らんのですね。だから、家庭と、そういう養成の教育としてのお仕事が両立するような体制が病院管理全体の上からできていかないと育たないんじゃないか。いつでも行ってみるとフレッシュマンなんですね。私、教員養成をいくらか知っているんですが、公衆衛生院で拝見していると、どうもそんな印象を受けますね。

荒井 看護の教育者のコーオーディネーターとしての能力というんで

専門は深く、視野は広く

司会 いちばん直線的なやり方といいですか、それは一般教育の範囲を広げて行くことが1つあると思います。假定条件として、前提条件として。もう1つは、ご専門はどのパートかわかりませんが、ご専門を深く突っ込みますと、それが深ければ深いほど隣接領域もひじょうに明るくなる、これは妙なものです。あるパートで深く入っちゃうと、そうするとずうっと先が見えて来るというやつですね。なんか魔術にかかったような印象を受けるかも知れませんが、たとえば私が看護教育のカリキュラムの問題について素人流でのぞかしていただくと、そうするとその中から振り返って教育学の基本原理に頂戴できるものがかかり見えて来ますね。そうして、かててはベッドサイドのところだけじゃなくてコミュニティサイド、社会領域の問題にパッと焦点が行きますでしょう。だから何しろ今の専門の分野をもっともっと深く掘れということが1つだと思います。そうすると、掘り切って行く過程でかなり横へ広がるものです。拡がらなければ、それこそ知識の処理ができないわけです。必要に応じてぶつかれば、自然にある程度拡がって行きますからね。究極的には、もちろん看護学に

すか、いわゆるいろいろな科目の橋渡しの役目のような能力をつけるということがひじょうに必要で、たとえば専任教員が小児看護を受持つなんていう能力じゃなくて、あらゆる看護学なり、学問なりのあい間をわかるような能力をつけると、そういう教育を指導者にもっとしていったらいいというような感じをきょうの話から受けるんですけれども、そういう能力の開拓というのはどういう形でできるんでしょうか。

お戻りになるわけですが、隣接領域をこれからは見てないとツンボ座じきになってしまう時代でしょう。逆に私は司会どころじゃなくてお話を聞いていると、これはというのがずいぶんありますね。先生方のご発言の中にもあったと思います。

都築 教育目標に向って満足の行くものには遙か遠いと、処理できないとはちょっと申しかねますけれども、遙かに遠いものになるという恐れは持っております。

司会 教養講座的なものを開かれたりしてスタッフが合流する機会がずいぶんありますでしょう。

前田 私たちは病院の方にできるだけ参加していただいております。とてもじゃないけれども1人よがりではできませんよね。

司会 そうでないといふ横への視野というものは拡がらないですね。

前田 ずいぶんそれで拡がります。それで。向うの方と接していると、こっちの足りなさがよくわかります。ですから、私も臨床教員している人たちに、折があったら一般教養の授業に出るようにしたい。

本誌 どうもいろいろありがとうございました。